

「楽譜教授」村田松泉の考察

— 横式箏曲譜考案を中心とした音楽実践 —

衣笠 詠子(東京藝術大学大学院)

本研究では、現在箏曲山田流で使われている横式箏曲譜の多くが参考にしたと思われる『箏のかざみ』の最初の著者、村田松泉(本名村田ミイ)について出生から追い、東京音楽学校講師時代に成した楽譜作成を含めた数々の音楽実践を明らかにし、自らを「楽譜教授」として楽譜を使った新しい教授法で全国の修習者に範を垂れた村田松泉に光を当てた。

村田松泉の音楽実践は①『箏のかざみ』にみられる横式箏曲譜の創案、②『箏曲集第三編』の採譜、③150曲の作曲活動の3つに分けられる。

①村田松泉の考案した横式箏曲譜は、『箏のかざみ』として博信堂より大正5年(1916)から廃版となる昭和50年代まで刊行された。同本は洋楽に倣い五線譜を応用した横書きであり、生田、山田両流の手ほどきから難曲が収載され、リズムや手法が簡単な暗号に置き換えられていたこともあり大正初期から昭和初期にかけ、箏曲を習う幅広い年齢層に大変な売れ行きであったという。

②『箏曲集第三編』は未刊のまま草稿が東京藝術大学に保管されていることもあり、先行研究では採譜者が明らかにされていなかった。本研究では、その草稿の筆跡や手記、また当時の雑誌『三曲』での藤田俊一の証言などから村田松泉が行ったことが分かった。

③150曲の作品を残しておきながら、戦禍による焼失で現在は未完の曲を含め48曲を確認、当時異業種で活躍していた人々との関わりも明らかとなった。また、本研究では大正から昭和初期にかけて作曲され、弘田龍太郎編曲のオーケストラ曲『黎明』と、雅楽三管との合奏曲『星の現想』をご遺族保管の手稿譜を基に再現演奏した。

村田松泉が広く認知されていないのは、社会的背景や自らを「楽譜教授」として新しい教授法で郷里の新潟で静かに後進を育てたためでもあると考えられる。しかしながら彼女の生い立ちからその音楽実践を知るにつれ、現在の箏曲における教授法の礎を築いた一人であることが推測された。